

好色世之介

小説

宇野信夫



宇野信夫

小説



平凡社

小説 好色世之介 定価 二二〇〇円

一九八二年九月一日 初版第一刷

著者——宇野信夫

発行者——下中邦彦

発行所——株式会社平凡社

東京都千代田区三番町五番地

郵便番号 一〇二 振替・東京八—二九六三九

電話 (〇三) 二六五—〇四五—

印刷——図書印刷株式会社

製本——株式会社石津製本所

© 宇野信夫 1982

Printed in Japan

製本不良本はお取替え致しますので読者サービス係までお送り下さい。(送料は小社負担)

好色世之介

小説

宇野信夫





定價1200円 0093-826760-7600

此为试读, 需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

はしがき 5

火にくべた糸屑 7

浮世の常 45

好色世之介 83

浮寝の弥七 117

おんなの太鼓 147

とわは与作の女房 173

師走坊主 207

西鶴ものがたり

人の心の底の底 240

女扇 244

装幀・装画 安野光雅

はしがき

国文科に籍をおいた学生時代、私は、近松と西鶴を一生懸命に勉強した。文筆で世をわたるようになってから、近松の『曾根崎心中』をはじめ、殆どの心中物を脚色した。西鶴のものも数篇脚色した。

去年から今年にかけて、それらの戯曲を通読してみた。というのは、近松、西鶴を私流に脚色して、小説に書きかえてみたいと思ったからである。ところが、近松にはどうにも動きがとれず、手が出なかった。それに反して、西鶴は、実に自由に、小説にすることができた。これは、近松は浄瑠璃の作家で、西鶴は小説家である所以であるかも知れない。おこがましい言分ながら、西鶴の原本と私の作を読みあわせて下されば、私がいかにのびのびと西鶴を自分の世界にひきこんだかがおわかりになるだろうと思う。

『おんなの太鼓』と『とわは与作の女房』の二篇は雑誌に発表したが、あとはこの本を出すために、書き下ろした。

『女扇』と『人の心の底の底』は、いわば西鶴の直訳ともいうべきもので、こういうことも西鶴を現代につたえるためには、満更意義のないことではないと思って収録した。

昭和五十七年の新秋

宇野信夫

火にくべた糸屑

見るから頼もしげな行者だ。

読経どきようの聲が朗々と家中うちじゅうに鳴り響く。団扇太鼓うちわを叩く節くれだった腕のたくましさ。こんどの行者は今までの人とは段ちがいだ。

ものの半刻はんときも団扇太鼓を叩き続けた行者が、だしぬけにぴったりと手をとめ、経をやめ、ずしん、と音をたてて突伏したかと思うと、わなわなと全身を顫わせて、

「お父とう——」と、うめくように言った。

「お父とう、私わたしがわかりますか、私ですよ、倅わがしですよ」

「倅か、小さい兄あにやか」

父親が行者のそばへにじり寄ると、

「お父とうもお母かアも、妹も、そこにいるね」

「ああ、いるよ、みんな、お前のことを心配して、こうして行者さんにお願ひして、のりうつて貰った。ばあさん、何をぼんやり、小さい兄あにやがのりうつたぞ」

うつむいていた母親は顔をあげて、

「小さい兄あにや、お母かアだよ。お母かアは、ここにいるよ」

「心配をかけて、すみません。私は牢の中で、毎日、お父とうとお母かアを思わない日はないよ」

父親と母親と妹と——三人は声をあわせて泣きだした。

「今日は、行者様を頼んでくれたので、こうしてみんなの前に出られました。あらたかな行者様のおかげです。行者様に礼をして下さいよ」

「するともするとも。ばあさん、お前も何か言いなさいよ」

「お前は、どうして、そんなだいたいそれたことをしでかしてくれたのだよ」涙の中で母親

は言った。

「それを今言っても仕様ががない。この上は、私を助けるてだてを考えて下さい」

「お父^とうは、どんなことでもして、お前を助けるよ」

「お前が助かれれば、お母^かアの命なんかいらないよ」

「お母アの命は、私の命とつりかえにはならないよ。金だよ。世の中は金だからね。金をつかえば、必ず私の命も何とかなるよ」

「お父うは、金なんか惜しくない。どうすればお前の命が助かるのだえ」

「金を使って、おまじないをするのだよ。行者様を頼んで、明日^{あす}から護摩^{ごま}を焚いて、おまじないをして下さい。そうすれば、私は屹度助かるよ」

「明日から護摩を焚いておまじないをするのか。わかった、わかった。明日から必ずおまじないをするから、心配するな」

「安心しました。毎日一度ずつ願います。早く助けて下さい。それから、行者様のお礼を忘れずに。それじゃアお父う、お母ア、妹、さようなら。行者様にお礼をはずんで下さい。さらば——」

行者は、上氣した顔をあげた。とたんに、襖があいて、長男が入ってきた。

「またはじまったか」

顔をこわばらせて、長男はずつけりと言った。えたいの知れない行者をとつかえひきかえつれてくるのを、長男はかねてから苦々しく思っていた。

「今、行者様に御祈禱をお願いしたら、あの子が行者様にのりうつてね」と、母親がとりなし顔に言うと、

「護摩を焚いてお祈りすれば、小さい兄^{あに}の命は助かるんだって」と、妹がつづく。

「馬鹿なことを言うな。おい、行者さん、くだらないことを言って、ごまかそうとしても、そうはいかない、家の者はごまかせても、おれだけは欺^{あざむ}かれぬぞ」

「お許し下さい。伴は大の信心ぎらいで——どうぞ、お氣になされますな」

言いながら、瞑目して膝の上で長い数珠をつまぐっている行者の前に、父親が用意の紙包をさし出すと、行者は静かに眼をみひらいて、

「あなた方御夫婦は、この堺で一というて二とさながらぬ分限者じゃが、お氣の毒に、御子息が不出^{ふで}来^きじゃ。一人は他国で重い科^{とが}、一人は、かくの如^{ごと}き度^どしがたき御人^{ごじん}——この

後^{のち}ともに、信心が肝腎じゃ」

「お父^とう、いいからその金を、ひっこめて下さい、しまつて下さい」

行者は紙包をつかんで、素早く襖の外へ出た。母親と妹が送つてゆく。

「金返^{かへ}せ、えせ坊主、まやかし坊主」

追おうとする兄を、

「おちつけ、おちつけ」と、父親がとめる。母親と妹が戻つてきて、やっとそこへ坐らせて、

「これ兄^{あに}や、わたしは、小さい兄^{あに}やが助けたい、それがわが身にやわからぬか」

「わかりますよお母^かア、わかりますが、あいつの命が助けたいからつて、何もあんなごまかし坊主に、もつたいたない、お金まで恵んでやる必要がどこにあります」

「兄^{あに}や、まア聞け」と、父親が声をいからせて、

「わが身にとつて、あれはたった一人の弟じゃぞよ。わが身は、あれを不惑とは思わぬか、助けてやりたいとは思わぬか」

「小^ちさい兄^{あに}やは、今、他国で、命をとられようとしているのですよ」と、妹も父親につ

く。

「それはわかつている。あいつがつまらぬ口論から友達を斬って、その科で命をとられようとしているという知らせのあったのは、今月はじめ、それからというもの私は稼業をうつちやらかして、方々駆けずり廻っているのは知っての通りじゃ。祈禱やおまじないや占では、あいつの命は助からん。むだに金を散らすだけのこっちゃ。お父う、あなたも一代で身代をこしらえた人にも似合わぬ、むだに金を使っはいかん。金は、使うべきところに使わにやならん。使い途は、ほかにある」

「ほかにある？」と、父親はききとがめる。

「世の中に、金ほどあらたかなものはない。その金の使い方一つで、あいつは、助かるかも知れん。いや、助かる」

長男の力のこもった口調に、両親も妹も思わず、

「助かる？」と聞き返せば、長男はことさらに声をひそめて、

「実は、今日、私はお役所へ行った」

「お役所へ」と父親。

「それで、あるお役人に会って、弟のことを話した」

「そのお役人は誰だえ」と母親。

「まアまア、それはあとでわかることじゃ。そのお役人は、助かる脈は充分ある、と仰っしゃった」

「助かる脈がある」と、父親がのり出す。

先年、年貢のことで知合いになった役人の所へ、長男はたずねて行って相談すると、役人は声をひそめて、

「お前たちは、金を積む気はあるか」と言った。

「ござります」と言うと、お前の弟が間違いをおこした和歌山の奉行は、融通がきく。

金を出す気があるなら、どうにかなるかも知れんと、奉行にあてて手紙を書いてくれた。御覧、これがその手紙じゃ」と、懷から書状を出してみせる。

もっと頼みになる話だと思つた父親は、内心がっかりして、

「それはまア、どこの国のお役人でも、お金でなんとかなるものだが、あいつは、ただの科人とがじんじゃない。かりにも人を手にかけたのだからな」